
エンドレスラブ

唐務新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンドレスラブ

【ZPDF】

Z0953P

【作者名】

唐務新斗

【あらすじ】

男と女は分かっていた。

二人の仲はもう終わっているのだと。

別れを告げて、それぞれの道を歩き出す。

あるレストランで、男と女が向かい合い、静かに食事をしていた。張り詰めていた空気を先に破ったのは男の方だった。

「そろそろ、終わりにしないか」

「そうね」

ナイフを動かす手は相変わらずそのままに、まったく驚きもせず、
「ぐぐぐく当然のことのように女は返し、そして、肉片を口に運んだ。
男はワイングラスを手にし、真紅の液体を軽く口に含んだ。芳醇
な香りと、かすかな苦味は、彼女を彷彿とさせなくも無い。

「一目ぼれだつたんだけどな」

「私もよ」

そこで男と女の視線は絡み合い、そして同時に、言い放つ、
「でも、時間の無駄だつたみたいだね」

と。

一人は思わず苦笑いをする。

「本当に時間の無駄だつた」

「今、こうして別れ話をしているという記憶すらも無駄ね」

二人は店から出ると、さよならも言わず、そのまま互いに逆の方
向へと歩き出した。もう一度と会うことはあるまいという想いを胸
に抱いて。

その帰り道、男は足を滑らせ駅の階段から落ちた。一方、女は立
ち寄った古本屋の書棚から崩れ落ちた分厚い書籍でしたたかに頭を
打つた。

白い壁に囲まれた病院で、一人の男と一人の女が出会いつ。

「はじめてまして。俺は記憶喪失で入院しているんだ」

「私もよ」

「でも」一人は声を揃えて、「始めてあつた気がしない」

激しくも甘い胸のときめきに、これが一目ぼれといつものなのかな
と、彼と彼女はほとばしる激情の渦に飲み込まれていく。

(後書き)

すなわち腐れ縁。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0953p/>

エンドレスラブ

2010年11月23日22時15分発行